

科目区分 FD シンポジウム

授業科目名 教職教養課題特講 I

タイトル 小規模校での実習経験を踏まえた愛媛県を志望する教員養成

執筆者の所属・氏名 教職大学院・本田哲也

教職教養課題特講 I (駕原先生)

愛媛県内小規模校での実習内容についての課題の整理等

1. 愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実

愛媛県内の義務教育段階の教員採用人数(予定)は平成28年～平成40年の間、小学校教員平均140人、中学校教員平均75人程度の採用人数で推移することが見込まれる。この講義では、大量採用時代に愛媛大学教育学部としてどのような教員養成ができるのかを考える。過去の教育学部生のアンケート結果から次のことが分かっている。1年次から教員免許を取得し教員を志しているの、教育学部に入学したと回答する学生ほど、大学の講義を実際に受けて、また観察実習に行き様々なことを経験する中で、私に教師が務まるのかと考えるようになる学生が多い。このような学生に自信を持ってもらうこと、様々な学校現場で通用する力を身に付けてもらう取組の必要性が提起された。

また、ミッションの再定義により第3期中期計画中に達成する必要がある愛媛県内教員採用比率の目標値の達成について厳しい現状がある。

そこで、愛媛県の教員になりたいというモチベーションを維持し高めるために、県内各地の各学校種での教育の実際を知る機会を積極的に作る必要性が提起された。この他にも、過去の学生アンケートより、2年生の時にふるさと実習を参加している学生のほとんどが教員採用試験を受験しているというデータの裏付けもあり積極的に学校現場を経験させる機会を提供させることになった。

2. なぜ、山間部・島しょ部の小規模校か。

愛媛県の小・中学校総数の大部分は小規模校であることから、教育学部の教員養成は、

小規模校の教員養成でもあることが確認された。愛媛大学教育学部の場合には、都市部の学校は、附属学校での実習があり、松山市近辺の学校でも実習機会が確保されているため、自らも経験したことのない多様な学校現場の理解のために島しょ部の小規模校が選ばれることになった。

受講生の感想からも1人の先生がたくさんの仕事をこなしていて、教師の仕事の実際が分かったという感想が得られたことからこのプログラムの狙いが学生に理解されていることが分かる。

3. プログラムの系統性

小学校サブコース所属は、1年生次の新入生セミナーB、教職教養課題特講I・II・IIIという科目群を用意し、系統性を持たせるように工夫した。地域の先生を外部講師として招聘し、その実際を聞く取り組みもあった。具体的には、教職教養課題特講Iでは、教員育成指標の取り組みや採用試験の状況等についても提示してきた。IIについては、教育を地域の日からみるということで、県警や子どもたちに関わる様々な施設の方々から話を聞く。IIIでは、地域の方に来ていただいて、教員採用試験のマナー、教職のマナー、どのようなところをどのように合格するのかという具体的な対策について考えてきた。

また、初等社会科教育法、初等生活科教育法での実地指導講師の先生は、愛媛県内の様々な場所を経験した先生を招聘した。

4. 受講生のアンケート結果

・2016年度11月時

回答者の内訳は、愛媛県内40名、県外出身者が50名であった。訪問全体の評価は、4点満点の平均で3.84であった。教職への志望度合いの変化について聞いた項目では、「高くなった」が49名、「変わらない」が26名、「低くなった」が2名であった。

・2016年度1月時

訪問全体の評価は、4点満点評価の平均で3.83であった。教職への志望度合いの変化は、「高くなった」が24名、「変わらない」が13名、「低くなった」が0名であった。

・2017年度11月時

30名の回答者のうち、県内出身者17名は愛媛県内で働くことを希望している。県外出身者13人のうち1名が県内で働きたいということであった。訪問全体の評価は、4点満点の平均で3.86であった。教職への志望度合いの変化は、「高くなった」が26名、「変わらない」が4名であった。変わらないと回答した学生も否定的な理由からではなく、「教師の良さを改めて感じたから」や「教師の仕事について実習等を通じて想像がついていたので変わらない」というものであった。

・2017年度1月時 回答者20名

20名の回答者のうち、県内出身者15人中14人が愛媛県内で働くことを希望している。県外5人中3人が県内で働きたい等いことであった。訪問全体の評価は、4点満点の平均で3.95であった。教職への志望度合いの変化は、「高くなった」が18名、「変わらない」が2名であった。

5. シンポジウムを踏まえて

シンポジウムを踏まえての授業改善へ取り組む必要があることは以下の2点だと感じた。第1に学生は学ぶことにより不安を感じることや、進路選択について迷いが生ずることもあることである。大学での学びにより高校段階での進路選択とは異なる現実や教師を取り巻く環境変化の厳しさに触れることが多くなる。このことに対するケアを大学教師としてしなければならないと感じた。そのための方法として、外部講師による実際の経験談を聞くことや、本プログラムのように、現場を体験させる機会を確保することである。また、外部講師にも「良い」ことだけでなく、抱えている「悩み」や「葛藤」を話してもらうことにより、学生自身に困難な場面に直面してもどのようにして乗り越えたらよいかを考えてもらう機会を提供したい。

第2に学生は現場で学ぶことも多いということである。本プログラムを通じて小規模校

の教育の現実を知ったとしても教職への志望度合いの変化が肯定的に変化していることは特徴的である。大学教員が用意したプログラムから得られる効果を超えて学生は自らの感性やアンテナから学びや気づきを得ている。このような機会を確保すると同時に、それを学生同士で共有することや討議することを通じて、十人十色の学びがあることを講義を通じて確認したい。

以上